

## 高見玄一郎著『港の世界史』

小林 照 夫

(関東学院大学)

本書の著者高見氏は、1962年に東洋経済新報社から『近代港湾の成立と発展』を公刊し、生産・流通の史的描写を通して、近代港湾の形成と成立を実証的に描きあげたことによって、港湾経済学に関して多大な影響を与えたことは、周知のことである。その著者がこの度刊行した『港の世界史』は、過去の著者の名著よりも遥かに大きな構想に立ったもので、港を視覚に置き世界史を読むといっても過言ではない著書と評価したい。

本書は、Ⅰ) 古典古代、Ⅱ) 中国の古代水運と港湾、Ⅲ) 中世の谷間から、Ⅳ) 大航海の時代、Ⅴ) アムステルダム の貿易と海運、Ⅵ) インド・太平洋のライバルたち、Ⅶ) 偉大なるロンドン — 近代港湾の成立、Ⅷ) アメリカにおける発展 — 現代への展開、の8章を骨子として構成されている。

筆者自身港と都市の関連を史的に考察することを中心とした業績をこれまで幾つか発表しているが、本書は世界の港の発達を促した生産・流通を中心に、その背後での政治形態や貿易・海運の諸文化領域を重視したスケールの大きい野心的な力作であるだけに、筆者の力量ではその全体について論じることは不可能なので、要点を絞って紹介したい。

著者の本書の狙いは、著者がいうように、「・・・現代資本主義はヨーロッパに始まり、アメリカで高度の成長をとげた。こうした基本的な流れの中で後世の資本主義を準備した古代、中世を含めて、『港』がどのように成長したかをたどった。その流れのなかには、一般的な法則があるはずである。こうした発展の法則と、それぞれの国によって異なる発展の特殊性を比較することによって、それぞれの港をより良く理解することが出来ると思う。」(8ページ)と叙述するところにある。その意味からも、本書は、港湾の歴史的発展の体系づけに力点を置くのではなく、港と資本主義の発展がどのように作用してきたかを念頭に入れた、港を通して見た世界史の書といえる。

一冊の書物をもって世界史を描くことは難しい。19世紀の代表的歴史家ランケ(Lepold von Ranke)でさえ、世界史を描くことに苦慮した。勿論そこでは19

世紀ヨーロッパ人の近代史観に制約を受けていたことは事実であった。しかし、それにしても世界史を叙述することは難しい。本書は海上商業にも活躍したイスラムの港についての論述はないが、資本主義の発展と関連させて欧米を舞台に港を論じた時、彼らにとっての心の故郷古典古代が充分なまでに描かれているし、欧米の近現代を描写するに必要な中国や日本が取り上げられているので、時間と空間において世界史たる条件を充分なまでに満している。

I章の古典古代は「ペロポネソスの遺跡」から始まっている。古代オリエントの世界を巧みな文章で我々に語りかける。古代史に関する取り分け新しい史料は用いられていないが、著者が港のロマンを求めてなんとなく足を運んだそのエーゲ海の港の舞台が、著者の学問的蓄積と重なりあって、実証史学の重みをもたせた。特に「船庫と円形港湾」に関する叙述は古代の港についての知識を与えてくれるばかりでなく、その背後に潜む港に寄せた哲学を同時に学ばせてくれる。そして、このような叙述が随所に見られるので大変面白い。

II章の古代水運と港湾でも、著者の足で綴る歴史の面白さが随所に見られる。特に「海港への展望」では、これまでの史料を下敷きとしながら、高見説が展開されている。

III章には「中世の谷間から」という章題がつけられている。歴史を学ぶものにとっては、この表現に心が奪われた。「中世の谷間」とはルネサンス人がいうDark Agesという意味をからませた表現であろう。ところが、著者は、この個所での港の機能を北イタリアの都市ヴェネチアに探りながら、次第にハンザ同盟の諸都市の交易の在り方や港の機能へと視覚を変えている。著者のこのような考察のなかに北イタリア諸都市とハンザ同盟諸都市の異質性を言及している。そして、そのような考察によって、狭義での港の発達史ではなく、中世の港と都市の構造的理解が可能となる叙述の展開が、そこではみられる。

しかし、IV章の「大航海の時代」の叙述は史料の制約によるものと思うが、航海のロマンにページがさかれ、港の機能と役割についての考察が若干欠けるような気がする。そのためか、これまでの書物で言われているような、航海史の枠組みを出るものではない。

V章では、大海運国を形成したオランダの世界的商業都市アムステルダム都市形成史と港湾の関わりが実証的に記されている。そして、そこでは、著者が長い間アムステルダムの港湾都市をヨーロッパ理解の鍵として見てきただけのことはあって、海運と港と都市の関係が巧みに描写されている。

VI章は「インド・太平洋のライバルたち」と題されているように、欧米と東洋、正にその近代と前近代が、別言すれば、欧米の資本蓄積と収奪の世界が、論述されている。特に、香港・上海・横浜の記述には史料も吟味されており、これらの港が英国や

米国にとって一体何であったのかがとても良く理解できる。欧米の近代の豊かさはアジア諸国に対する取奪を通して展開されたもので、歴史の陽と陰の世界を対応させて初めて世界史的描写が可能となる。その意味でも、この個所での港の考察が、一つの都市の港に留まることなく、資本主義経済が形成された有機的な舞台の中で学ばせてくれたことを嬉しく思う。

次に、著者が最も力点を置いているロンドン港の考察が、VII章で展開されている。この章では、「偉大なるロンドンー近代港湾の成立」とあるように、初期の港の風景から論述が展開されており、この章をもってロンドン港の歴史の変遷が具体的に把握できる。特に、近代前と近代に関する叙述にも考察の視覚が向けられているので、一層興味がもたれる。著者は、工業生産と世界市場の確立を促した産業革命に照準を合わせ、いわゆる近代初期のドック体系を描き、鉄道と蒸気船とドックの關係に論を進めている。そして、その論拠を整理していく過程で、港湾のトランジフトという新しい形態の形成が、近代港湾の成立であるとみている。そして、その後の一連の港湾の発展した形態の歴史的位置づけということに関しては、つまり20世紀の初めにみられた港湾の動向をどう考えるのかという形で集約させ、その時期を近代港湾の一応の完成期とみなしている。それは、この時期になって、「完成された資本主義形態、つまり港が個々のドッグ会社によってではなく、全体としての機能を包括したポートオーソリティという公企業体によって経営されるようになった……」（271ページ）からである。

著者は、ロンドン港に産業資本と埠頭の關係を求め、近代港湾の成立と完成について言及したが、VIII章では、港湾の現代的意味とその機能を近代港湾と接続させることによって論じた。ここでも、「アメリカという国」・「マーク・トウェインのミシシッピ」・「ニューヨーク物語」という節を通して、風土や地理と港湾の発達を関連づけながら、先はじめに港の史的展開を試みている。この個所の叙述の展開は豊富な資料の裏付けをもってなされているので、読者に港の発展史に限ることのない興味を抱かせる。これは、著者が、資料（史料）を充分なまでに消化し、港に寄せる具体的な描写を、自分のものに行っているからであろう。

著者がいうには、ニューヨークの港が、現代港湾の研究に重要な意義をもたせるのは、正に現代を物語るに相応しい港湾の経済的機能と、その組織形態を知るうえにおいて、意味があるからである。（297ページ）そして、その具体的な事例を「ポート・オーソリティ」・「海・空・陸の複合港湾機能」・「コンテナとコンピュータ」・「貿易情報システムへの展開」等の論述の中に求めている。既述した事項はいずれも現代との関わりにおいて重要であり、このことが近代の港湾と現代の港湾との境界線を画している。

さて以上のように、本書の概観を紹介してきた。読みながら感じたことは、本書は港湾の発達史ではなく、港を考察の視覚においた「みなとの文化史」といった方が適切であるように、著者の叙述は多岐にわたる文化諸領域に及んでいる。逆にそのことが、著者が懸念しているように、「本書の内容が体系的でない」とか、「突っ込み方が足りないと思われるであろう」とか、という表現（プロローグ）になっているのだと思うが、筆者は港にフォーカスをあてた素晴らしい世界史の書物だと思う。筆者自身、先に述べたように、「港と都市の関わり」や「資本主義との関わりで港湾発達史」を研究テーマにしているが、歴史を学生に教える者にとっては、自分のテーマの関わりで港湾に関する書物を選ぶことが難しかった。何故なら、これまで港に関する書物というと、狭い範囲での専門性だけが優先していたからである。ところが、本書は、専門的学術書であることは勿論であるが、港が諸文化領域と関わりをもって描かれているので、本書を読んだことによって、港に関心を寄せる人が増えるであろうと確信している。また、本書に掲載されている図版も読者への関心を誘う。

(朝日新聞社 1989・6刊 A 5判 334+XIVページ 2900円)